防衛ホーム新聞社 編纂
『彰古館――知られざる軍陣医学の軌跡――』

陸上自衛隊三宿駐屯地（東京都世田谷区）の一角に，医療史博物館「彰古館」があり，明治以降の軍陣医学を物語る多くの資料を所蔵し，その数は8,000点とも言われる．本書は，2002年3月から2009年5月まで「防衛ホーム新聞」に「彰古館往来」として，連載されたものを編纂したもので，所蔵されている貴重な物品や写真，書類の豊富な写真とともにわかりやすい解説を付した軍陣医学史となっている．今日まで，このような貴重な本は，発行されておらず待望の一冊である．

軍陣医学とは，military medicineのことであり，日本においては，第二次大戦後死語となった用語である．したがって，厳密な定義をしてみても意味はないだろう．戦場で，負傷したり，病気にかかった兵士の治療にかかわる医学であるが，日本以外の国では，現実の問題として存在している．特にアメリカ合衆国では，現在進行形の医学である．その概念の中には，今日では，予防，リハビリテーションを含んだ広範囲な活動内容を含んでいるとみてよいだろう．合衆国最大の病院グループは，退役軍人病院なのである．（職員数20万人以上）

戦争と医学の発達は，密接な関係があり，医療のあり方に大きな影響を持つことに異論はないだろう．しかし，日本においては，敗戦後，戦争という概念を持ち出すことは，タブーとなり，日陰に追いやられてきた．そのことが，日本の医療の影の部分を影としてではなく，存在しないもののように扱うこととなり，医学史を陰影のない塗り絵にしてしまっている．日本の戦後の医療を担ってきたのは，軍医として活動し，帰還した多くの医師や従軍した看護婦ではなかったか．その考え方，治療方法は，戦場において，修得されたものである．

アメリカ軍と日本軍との大きな違いは，アメリカ軍が，負傷者を後方に送り治療することを考えたのに対して，日本軍は，軍医が前線に出て治療をするために，軍医の戦死者が多かったという．そのため，軍医を確保するために，専門学校での医師の養成を進めた．看護婦の犠牲者も，第二次大戦では，1,000人を超えている．このような医療団の組織や教育，活動のあり方が，戦後の医療になんの影響も与えないというのは，ありえない仮定であろう．戦後の国立病院のほとんどが，傷痍軍人療養所をルーツとすることを考えると，戦争の影響を無視して，日本の医療史を語ることは不可能である．

そう考えると彰古館の扱いに寂しさをおぼえるのである．乏しい予算をやりくりして，貴重な物品を維持保管してきた自衛隊関係者に対して敬意を表したいが，日本人は，諸外国と比べると，博物館に対する熱意がかけている．そこに所蔵されているものは，単なる記念品ではない．思想が具現化されている過去の情報である．医学思想，科学思想の研究に過去の物品は欠かせない．

また，現在，日本においてこの分野を担当しているのは，当然，自衛隊ということになるが，医療に関しても，実戦経験がない．それは，もちろん，国民にとっての幸せであるが，それと，無関心というのは問題が別である．過去の経験を保存し，学習することは，きわめて重要である．確かに，兵器や戦闘方法が大きく異なる現在にそのまま適応できるわけではないが，有益であることは間違いない．日本人の特性として，過去のデータの解析が甘いといいたい方であるが，博物館を懐古趣味ではなく，貴重なデータの宝庫として利用していくべきであろう．費用を惜しんではならない．現在，各地に放置されている歴史的な物品の収集と保存，解析に組織的に取り組んでもらいたいとの思いは強いが，まず，医学史の中での扱いを考えてもらいたい．そのためには，根本的に，医学の中での医学史の軽視を見直すことが先決で

ある．と考えていくと，むなしくなっていくというのが本音であろうか．

さて，本書の内容であるが，掲載写真は375枚あり，明治，大正，昭和にわたり，現在の自衛隊の活動を含め，また，日本だけでなく外国の病院での治療風景の写真も含み，軍陣医学を研究する者には，またとない資料となっている．日本のランドセルのルーツであり，後に赤十字のマークになった赤一文字の医療背嚢，最古の臨床用X線装置，乃木大将のX線写真，乃木式義手などの写真とともに，わかりやすい解説や有名な脚気論争，八甲田山の遭難などのエピソードが紹介されており，歴史書としても興味深い読み物となっている．八甲田山遭難救出直後に死亡した山口少佐が，ピストル自殺ではなく，心臓麻痺であったなど小説とは違う点を指摘していたりしていて，興味が尽きない．軍陣医学関連の写真ばかりではなく，捕虜収容所の写真などもある．習志野捕虜収容所写真帖では，慰問に来た幼女に捕虜の視線が釘付けになっている写真は，涙を誘う．故国に残してきた子供を思うロシア兵の心情をよく捕らえているというのである．歴史を調べていると涙がとまらなくなることがある．それもまた，歴史を学ぶ楽しみである．

（谷中　　誠）

［防衛ホーム新聞社，〒162-0845 東京都新宿区市谷本村町3-26，TEL. 03（3268）0711，2009年9月，A5判，178頁＋カラー口絵8頁，1,500円＋税］